

聖書:使徒の働き19章21～40節

説教:真の神はどこにおられるのか

はじめに

パウロは、かつてユダヤ教パリサイ派の若きリーダーとして熱心に教会を迫害していたことがありました。それがある日、まぶしい光に照らされて地面に倒れると、よみがえられたイエスから声をかけられます。「サウロ、サウロ（回心する前のパウロの名）、なぜわたしを迫害するのか。」パウロが「主よ、あなたはどなたですか」と問うと、「わたしは、あなたがた迫害しているイエスである」と答えるのです。自分は、神のために一生懸命正しいことをしてきたと信じていたのに、実はその反対で、神を迫害していた。それは取り返しのつかないほどの大変な罪です。彼は衝撃を受けて地面に倒れてしまいます。しかし主は、そのようなパウロの罪を赦すだけでなく、今度はキリストの福音を宣傳する者として召し出していきます。

そのような召しを受けたパウロは、地中海沿岸にある町々を三度にわたって巡り歩き、旧約聖書で預言者が語っていた救い主とは、エルサレムで十字架におかかりになって死なれ、三日目によみがえられたイエスと呼ばれる方であることを証ししていきます。

前回はパウロがエペソの町に滞在していたときに起きた不思議なことを見ました。彼が身につけていた手ぬぐいや前掛けに手を触れただけで病人はいやされ、悪霊も追い出されるという不思議なことが起きて、ますます人々は主イエスの名をあがめるようになりました。魔術を行って、お金儲けをしていた人々も悔い改めて高価な書物を焼き、信仰に入りました。

## 1 銀細工職人組合の危機感

### 1) デモ集会

しかし単純に喜んでられません。物事が一方に大きく変化するとき、それを止めようとする反動が起きるものです。エペソの町もそうでした。銀細工職人組合の組頭をしていたデメテリオスが職人たちを集めて緊急集会を開き、こう訴えます。25から27節。「皆さん。ご承知のとおり、私たちが繁盛しているのはこの仕事のおかげです。ところが、見聞きしているように、あのパウロが、手で造った物は神ではないと言って、エペソだけでなく、アジアのほぼ全域にわたって、大勢の人々を説き伏せ、迷わせてしまいました。これでは、私たちの仕事

の評判が悪くなる恐れがあるばかりか、偉大な女神アルテミスの神殿も軽んじられ、全アジア、全世界が拜むこの女神のご威光さえ失われそうです。」

調べてみると、エペソにはアルテミス神殿があり、当時、地中海地域にあった建造物で一番大きなものであったらしい。そうしますと、一目見ようとたくさんの人たちがお参りに来ることになる。神殿の前にはおみやげ物屋が立ち並ぶ。そこで何を売っているか。アルテミス神殿の模型です。銀細工職人たちはそれを造っていた。日本風に言えば神棚を造っていた。神棚があるということは、当然、女神であるアルテミスをかたどった偶像も造って土産物屋で売っていた。巡礼に来た人たちは、神棚とアルテミスの偶像を拝みながら買って行く。それが彼らの収入となります。二千年前の地中海の宗教というと、私たちに何となく遠い世界のように感じますが、よく見るとほとんど日本と変わらない。同じことをしている。

皆さんも見たことがあると思いますが、ホームセンターでは神棚を売っています。年末になれば鏡餅も売れば、しめ飾りもある。売れ残ったらどうするのでしょうか。「本日限り三割引」とか「半額処分」とか言って売りさばくのか。もしそうなら日本の神さまも大変なことだと心配になります。

### 2) パウロへの非難

その銀細工職人たちは、自分たちの商売が立ちゆかなくなるかもしれないと不安になった。そのきっかけはパウロが語ったことばです。「あのパウロが、手で造った物は神ではない」と言って、人々を迷わせている。

デメテリオスの演説を聴いて人々は興奮して、一斉に「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と叫び始め、町中が大混乱に陥る騒ぎになる。パウロと一緒に活動したガイオとアリスタルコを見つけると、縛り上げて劇場に連れて行きつるし上げをしようとする。パウロは、これを見て二人を助けに行こうとしたのですが、仲間や友人たちに止められてしまいます。幸いにして、町の書記官が出て来て騒ぎを収めたので事なきを得ましたが、まかり間違えばガイオとアリスタルコは見せしめでいのちを失っていたかも知れません。

## 2 神の威光が失われる？

### 1) 「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」

ここでひとつのことを考えたいと思います。なぜエペソの町の人たちは、「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と叫んだのか。そのことです。このままでは偉大な女神アルテミスの神殿も軽んじられ、女神のご威光も失われてしまう。それはいけない。それでこのように叫んだ。そのようなことなのでしょう。でもいったい神の権威、ご威光は誰が守るのでしょうか。町の人たちに叫んでもらわなければいけないのでしょうか。

パウロはこのことについてこう語っていました。「この世界とそこにあるすべての物をお造りなされた神は、天地の主ですから、手で造られた宮にはお住みになりません。また、なにかが足りないように、人の手によって仕えられる必要もありません。」(17章24, 25節)

神がこの世界を造られたのであれば、人間に叫んでもらわなくても神の威光が軽んじられてしまうとか、傷ついてしまうようなことは起きません。考えてみれば当たり前のことです。それなのにエペソの人たちが「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と叫ぶのはどうしてか。

## 2) 「皆が幸せであればいいではないか」

本音が別の所にあります。デメテリオは、「私たちが繁盛しているのはこの仕事のおかげです」と言い、「これでは、私たちの仕事の評判が悪くなる恐れがある」とも言っている。アルテミス神を利用して儲けさせていただいている。アルテミス神が本物であるかどうかはどうでもよい。とにかく、他の国からは大勢の人たちがこぞって神殿にお参りにやって来るし、ありがたいと言って神棚を買い、偶像を買っていく。町は潤うし、みんな幸せになれるのだから、これはすばらしいことではないか。エペソの人たちはそう考えていた。ところがある日パウロがやってきて、「人の手で造った物は神ではない」などと言い始める。いらぬことを言って波風を立てる。パウロはとんでもないやつだ。これがデメテリオが言いたかったことなのでしょう。

出る杭は打たれる。日本のどこかにもありそうな話です。宗教のことに関して言えば、日本では宗教の自由がある。人が何を信じようが文句を言われる筋合いはない。そのような意見があります。そのとおりでしょう。

しかし何を信じるのかによって人のいのちが助かるのか、それとも失われるのか、全く違う結果になるというのならどうでしょう。何を信じても自由です、と言えなくなる。商品を買うときには高価な物であればあるほど、だれでも本物か偽物か一

生懸命調べます。まして信じることはそれ以上でしょう。偽物の神ではなく本物の神を選ぶべきです。空しいものを信じていのちを失うくらいなら、初めから信じない方がまだましだったことになる。ではいったい私たちを救うことのできる本物の神はどのようにして見分けることができるのか。次にそのことを見ましょう。

## 3 真の神

### 1) 手で造られたものではない

ちょうど今、日本の皇族の一人の女性が一般の男性と結婚するということがニュースになっております。一般男性の方と結婚すると皇室の籍を離れることになる。そのためにいろいろ手続きを踏まなければならないそうです。すばらしい装束を身につけて、まず天皇家の神である天照大神にお参りし、次に代々の天皇が祭られている神殿に入ってお参りをし、最後に八百万の神を祭る神殿にお参りをしたそうです。三つの神殿を掛け持ちで礼拝する。いったいどれが本当の神なのでしょう。三つ可能性がある。全部が本当の神。どれか一つだけ本当の神で、あとは偽物の神。すべて偽物の神。さあどれでしょう。

### 2) 罪を指摘する神

本物を見分ける基準についてパウロが語っています。17章29, 30節。「そのように私たちは神の子孫ですから、神である方を金や銀や石、人間の技術や考えで造った物と同じであると、考えるべきではありません。神はそのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今はどこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます。」

天照大神は日本の神話に登場する有名な神さまです。この神は大変人間的なところがあって、気に入らないことが起きると天岩戸に隠れて引きこもったりもする。人間に対して悔い改めを命じるというようなことはしません。

ところが聖書の神は私たちに罪の悔い改めを命じます。どうしてか。神がはじめにこの世界を造られたとき、私たちが楽しみながら生きていけるようにとエデンの園に住まわせてくださったのに、アダムが神の命令に背いて木の実を食べてしまった。そのときから人間は苦しみを味わうことになりました。アダムとエバの二人の息子カインとアベルはどうなったか。カインは弟アベルをねたんで殺してしまう。その性質は私たちに受け継がれています。ニュースを見ていれば、人が殺されない日はない。いつもどこかで誰かが殺されている。こんなことが

いつまで続いて良いわけがない、世界に平和が訪れますようにと皆願います。しかしいまだに世界に平和は訪れない。ますます世界は息苦しくなってきた。どうしてか。

神はパウロの口をとおして語ります。あなたは観客席に座って、あの政治家が悪いとか、この犯罪者は厳しく罰するべきだと言っているけれど、そのように言っているあなた自身が、すでに神に大きな罪を犯しているのだ。そのことに早く気がついて悔い改めなさい。

### 3) 罪から救う神

なぜこのような厳しいことを言うのでしょうか。家族の中に重い病気の人がいたとします。その人になんと言いますか。「病院に行ったらこわい目にあうだけだから、行くべきでない」と言いますか。むしろ、本人が嫌がっても首に縄をかけて出ても連れて行こうとする。

それと同じです。「悔い改めなさい」、言われて気持ちの良い人はいない。みないやだなと最初は思う。でもそれがあなたを救うというのであれば、これほど親切な神はいないとも言えます。

どれほど親切な神でしょう。私たちが背負いきれない罪をこの方は代わりに背負われる。私たちが払いきれない罪の賠償金をこの方がご自分のいのちと引き換えに払ってくださる。私たちはこのままでは死んで滅び行く者ですが、この方を信じる者に永遠のいのちを与えてくださると約束される。そのことを信じられるようにと、実際にこの方が三日目によみがえった姿をパウロにも示してくださる。どこまで親切でしょうか。

誰が本当の神なのでしょう。だれが本当に私たちのいのちのことを心配してくださるのでしょうか。手で造った立派な神社に住んでいる神でしょうか。

私たちは信じます。立派な神殿もなく、姿形もなく、私たちの目には見えないけれど、しかし二千年前に人となって来られた神、イエス・キリスト、私たちの前ではみすばらしい姿となり、十字架にまでおかかりなって死の苦しみを味わって下さった方。この方こそ、真の神であることをもう一度覚えたいと願います。